

平成23年度 光市立三井小学校 学校評価総括表（平成24年 2月実施）

評価基準 4ー達成 3ーおおむね達成 2ーもう少し 1ーできなかった

学校教育目標「やさしい子・考える子・たくましい子」					自己評価書				学校関係者評価書		
領域	年度当初の課題	重点目標	課題解決に向けての取組 (具体的方策・評価項目)	評価項目・評価指標	評価基準	評価点	目標の達成状況に関する意見 (取組の適切さの検証結果)	改善方策	評価点	評価(取組状況・達成状況に関する意見)	次年度に向けた学校運営の改善方法
学力力の向上	互いの違いを理解し、思いを伝え合い、高め合う「かわり」の中で、コミュニケーション能力を育成する必要がある。豊かなかわり合いをつくる活動や環境づくりが大切である。	④聞く力や伝える力などコミュニケーション能力を育成する。	コミュニケーション能力育成にかかわる研修会の実施。	◎教員一人一回以上研修、復伝(講義、書籍等)	4 全員、一回以上実施 3 8割、一回以上実施 2 5割、一回以上実施 1 5割未満、一回以上実施	3	それぞれが問題意識をもって研修・復伝を行い、互いの目の実践に反映させようができていた。その過程で生じた新たな課題について話し合いつつ、更に、聞く力をつけていくためにどうすればよいかを模索している。	今年度の成果と課題を整理する中で、「かわり」方を児童の姿で具体的に定義して、共通実践を強化していきたい。	3	研修会を行い、新しく課題ができたことを話し合うことは向上心につながると思われる。「聞く力」をつけていくとはどういうことなのか、模索方法でも検証結果に具体的に書かれると良い。	「かわる力」「聞く力」について、先進校ではどんな取組をしているのか、「聞く力」とは何かなど今一度原点に戻り今後とも研修していくことが大切である。
	学級によって、「授業が楽しい」教え方が分かりやすいという評価項目に違いがあった。研修を充実させ教師同士が教材研究・情報交換する時間を確保し授業改善していく必要がある。	⑤教師の授業力の向上を目指す。	・進んで授業公開。 ・情報交換会の実施。	◎教員一人一回以上授業公開 ◎保護者による授業評価 ◎「教師の観察項目」肯定的評価80%以上	4 授業への肯定的評価80%以上 3 授業への肯定的評価70%以上 2 授業への肯定的評価50%以上 1 授業への肯定的評価50%以下	3	教員の取組の熱心さを保護者は認めている。しかし、児童の評価とのずれがあり、児童の「分かりやすい」「楽しい」という評価は、感覚的なものにとまどっていると考えられる。分かりやすさと楽しさを具体的に伝えられる授業を目指していく必要がある。	授業ごとのねらいをより明確にして、そのための手立ての精度を高め、互いに学び合っていく機会となるように、教員同士の相互参観のあり方を工夫していきたい。	3	分かりやすい授業評価にする必要がある。そのためにも、学力向上プランや評価基準を参考にするなどの。	今までの授業評価を見直し新しい評価カードを教務・研修を中心にして作成した。使用してみて、意見聞きやすい評価表になるようにしたい。また、学力向上プランも保護者と共有し、その達成に努める。
	研修の時間に各学年の取り組みを交流し、地域の人材を活用しようとした。また、学年・学級だより等で取り組みを紹介するとともに身近な体験活動を大切にすることがある。キャリア教育と関連付けながら推進していく。	⑥体験活動をしっかり取り入れる。	・地域の人材や、専門家を活用した学習の実施。 ・キャリア教育の視点からも、体験活動の見直し。	◎活動を見直し、学年2回以上の活動の実施	4 全校で12回以上の体験活動の実施 3 全校で10回以上の体験活動の実施 2 全校で8回以上の体験活動の実施 1 全校で6回以上の体験活動の実施	4	1月に実施した交流会で全校で22単元の体験活動が報告された。幼稚園児や小学生、地域の人、専門家、野菜や種、環境にかかわることなど、学年に応じて様々な体験活動が工夫されていた。	体験活動をさらに充実していくために、ねらいは何か、めあては達成されたかなど評価する。学校に様子を掲示したり学年便りや学級だより等で取り組みを紹介したりする。児童の振り返りカードも活用する。	4	体験活動は、地域の方々とかかわりやつながりがあり、「心の教育」にも関係があると思われる。児童の振り返りカードは続けてほしい。	児童の「やってみよう」「楽しそうだな。」といったものを大切にして、キャリア教育につながる体験活動を仕組んでいきたい。
心の教育の重視	児童一人ひとりの夢の実現に向けて、情報等を提供することにより学校と家庭が一体となった学力の向上への取り組みを推進することが大切である。	①各自が達成目標をもち一人ひとりその目標を達成できるようにする。	・各自が1年間1つの目標をたてて継続的に実践。	◎児童アンケート ・目標の達成率・・・80%以上	4 目標の達成率80%以上 3 目標の達成率70%以上 2 目標の達成率60%以上 1 目標の達成率60%以下	3	児童の70%余りが肯定評価で、前期とあまり変わっていない状況である。「やくそく」と名の付く物が学校にはたくさんあり、保護者から「分かりにくい」との指摘を受けた。また、検証のないまま時間が経過し、かえって「やくそくを守らないでよい」という風潮を作り出してしまっている可能性がある。	約束の定着、習慣化については、児童・保護者へ、職員からの地道な啓発は今後も必要である。学校にある「やくそく」を精選し、学べたか検証したり、次の目標を定めたりすることにより、PDCAサイクルをきちんと踏む必要があるようにする。そのことにより、達成感を味わわせ、自分のこととして目標に取り組むことができるようにしたい。	3	「学校にはやくそくが多い」という指摘を受けて、見直しを行った。小・中連携も視野に入れ、学習習慣・国語・算数など家庭・学校での共通共助項目を設定し評価も加味する予定である。	
	テレビ視聴・ゲーム等の時間がまだ多く、学習時間が少ない。秩序ある生活をするため「わが家のやくそく」など家庭でやらなくてはならないことは保護者に伝えていく必要がある。	②寝る時間、起きる時間、学習時間や手伝い、読書時間等を決め、そのめあてを守る。	・生活チェックを活用し、早寝早起の実践。 ・全校体制での学習時間等のルールの確認および児童・家庭への呼びかけ。 ・保健の授業等での生活習慣・テレビやゲームの弊害等について啓発。	◎生活チェックで早寝早起の達成率80%以上 ◎生活チェックの早寝早起の達成率70%以上 ◎宿題等の提出100%や読書時間の確保をしている児童60%以上	4 生活チェックの早寝早起の達成率80%以上 3 生活チェックの早寝早起の達成率70%以上 2 生活チェックの早寝早起の達成率60%以上 1 生活チェックの早寝早起の達成率60%以下	4	生活チェックの結果は、早寝が96%、早起きが97%と児童の意識としては、達成できている。保護者アンケートの結果は、身に付いていないと答えた人が55%とやや低かった。できていない人は家族の生活スタイルの改善が必要だと分かった。早寝早起の習慣が身につけている人は、自分から褒賞も身につけているように思う。	早寝早起きの時刻を設定させ、毎週1回の生活チェックで児童の意識向上を図ることが今後も必要である。自動的に睡眠や生活リズムを整えることの大切さを保健だより・学級便り等で継続的に児童や保護者に働きかけることが重要である。	4	「早寝・早起き・朝ごはん」は基本的生活習慣の源である。これらのことが、学習・生活習慣を左右するといっても過言ではない。地道な努力が大切である。	「寝る時刻」「起きる時刻」など児童に決めさせて、毎週生活チェックを継続的に進行。
	朝のあいさつ運動を年長継続しているせい、あいさつはできるようになってきた。一方で友達同士や地域の人々へのあいさつについては自分から進んでやることは少ない。また、相手を思いやる言葉遣いも大切である。	③相手の気持ちを考えたあいさつ・言葉遣いができるようにする。	・あいさつ運動 週一回 ・人に感謝する言葉や人を褒める言葉20回を実践。 ・おもいやり・あいさつについての全体講話や指導。	◎児童アンケート ・人に感謝する言葉・褒める言葉20人・・・達成70%以上 ・地域に進んであいさつ20人・・・達成70%以上	4 アンケートの達成率70%以上 3 アンケートの達成率60%以上 2 アンケートの達成率50%以上 1 アンケートの達成率50%以下	4	児童の70%余りが肯定評価で、前期に比べれば微増という状況である。人数での達成状況としていたで自分から進んで行ったかなどあいさつのはじまりや感謝の言葉を伝えることの大切さなど本質的なところへの振り返りとらなかつたように思う。	今後は、あいさつや感謝の言葉など、伝える・答えることの大切さに重点を置いた呼びかけや取組の実践を重め、本能的なところを大切にしていきたいながら取組んでいきたい。また、教員・保護者・地域の方と連携しての取組として行きたい。	4	あいさつは、よくしていると思う。隣や近所の子にあいさつをしても返って来ないことがあった。その保護者に聞く「取っかかっていたらどうして」という返事がかえってきた。少しさみしいきがした。	あいさつの大切さの認識が薄い保護者もおられる。児童に限らず保護者のにも啓発・啓蒙する場をPTAと協力して設ける。
	落ち着いた行動ができない要因を探り個別の指導を行う必要がある。また、地域・保護者と協力して安心・安全な集団登下校を考える必要がある。	⑦安心、安全な登下校。学校生活を旨とする。	・全校同一歩調で安全な廊下歩行を指導。 ・交通立哨の気づきを活かした登下校の指導。	◎児童アンケート ・右側歩行している児童90%以上 ・地域、保護者、教職員の交通立哨による気づき	4 右側歩行を守っている 90%以上 3 右側歩行を守っている 70%以上 2 右側歩行を守っている 50%以上 1 右側歩行を守っている 50%以下	3	右側歩行の指導強化日を設け、全教員で指導に当たったことで、子どもたちも意識して心がけるようになった。右側歩行がほぼできていたという児童は、89.5%で、前日よりよくなった。また、交通立哨の気づきでは、前より手を挙げての横断やあいさつなどがよくなってきたという意見が多く書かれていた。	今回、指導強化日を2回設けたが、定期的な設けることで、さらに児童の意識を高まると共に、教員も意識して指導できるのではないと思う。また、各校の様子では、よくなってきているところは登校班を集めて指導していく。	3	指導強化日を設けたことは、児童や教職員のマンネリ化に効果があったように思う。	横断歩道は何のために手をあげるのか、廊下はなぜ走ってはいけないのかなど、意味や目的をもって指導し校内外の怪我防止にも努めたい。
体力・安全の実践	学校生活が楽しいと感じている児童の割合が学級によって相違がある。教師や児童の口頃の言動を振り返り、よい言葉掛けを工夫する必要がある。	⑧教育相談体制の充実を図り、不登校やいじめをなくす。	・全児童にアンケートを実施し、教育相談の実施。 ・生徒指導部会を開き、気になる児童を互いに把握し、組織として対応。 ・学校カウンセラーと連携して対応。	◎児童アンケートと全児童との教育相談を実施(年3回) ◎自己肯定感をもち児童90%	4 自己肯定感をもち 90%以上 3 自己肯定感をもち 80%以上 2 自己肯定感をもち 70%以上 1 自己肯定感をもち 70%以下	4	今回は、「うれしい言葉や行動」についてアンケートを実施して行った。また、児童の自己肯定感を高めるために各クラスで取り組みを工夫して行った。その成果が表れ、「学校生活が楽しい」と感じている児童が98.7%、児童や教師からの言動に喜びを感じている児童が99%、95%と、ともに高まった。	教育相談アンケートに向けて、各クラスで取組組んで成果が表れた。また、児童の自己肯定感を高めるために各クラスで取り組みを工夫して行った。その成果が表れ、「学校生活が楽しい」と感じている児童が98.7%、児童や教師からの言動に喜びを感じている児童が99%、95%と、ともに高まった。	4	悪いことをした時、しるタイミングがむづかしい時がある。時期を捉えて指導してほしい。自己肯定感はある場面ですべてよく心も育てたい。	「しる」時は毅然としてしる事が大切である。「しる」ことはよくあっても「ほめる」ことは少ないのでよいことはほめるとい、相手を思いやる心も育てたい。
	長期休業中などに計画年休取得に向けての働きかけが必要である。また、年休取得がしやすい補教体制を行うことが大切である。	⑨加労働による健康障害防止に努める。	・職員の間年休取平均年間15日以上取得。 ・勤務分掌の見直し、役割分担の明確化。	◎年間15日以上取得。 ・達成率90%	4 年休取得達成率90%以上 3 年休取得達成率80%以上 2 年休取得達成率70%以上 1 年休取得達成率70%以下	3	前年の時点で、年休取得は平均約9日であったが、積極的な働きかけも関係もあり個人的にはらつきはあるものの平均12日～13日になった。	後半になって、増加になったが充分な働きかけであったとは言えない。長期休業の計画年休取得に向けてなおささの働きかけが必要である。取得しやすいうちに教務を中心に補教体制を十分に整備していきたい。	3	全般的に、児童はあいさつをよくしている。今後とも続けてほしい。体験活動など学校・地域・家庭が協力して行っていくことが大切である。	・規律をしっかりと守らせる。 ・小中で連携し、生活習慣・学習習慣を身に付ける。 ・PTAと協力して、あいさつ・学習時間・睡眠時間の徹底を図る。 ・学力を確実に身に付け、自信をもたせる。
総合評価	学校関係者評価委員の総括意見		校長の総括意見								